

Sports に於ける勝敗とその指導

花 田 大四郎

「勝敗」はスポーツの本質である。勝敗のないスポーツは存在しない。勝敗を考えないスポーツは、スポーツ運動の如き外観は呈しても、それは単なる大筋郡の活動であり、スポーツの練習（準備）とは云い得ても、スポーツ活動其物ではあり得ない。

「スポーツは斗争の遊戯である」⁽¹⁾

「Sports とは……自己の能力を最高度に発揮しようとする 競技的各種運動で……」⁽²⁾

其の他スポーツの定義付けは種々存在しようが、こゝに斗争と云い、競技的運動と云われている様に、斗争による勝敗或は競技によって結果的に考えられる勝敗或は優劣等が本質的に存在することを物語っていると云えるであろう。例えば家族にて行かうハイキングは運動ではあっても、スポーツとは云えないが同じコースを通っても勝敗の促うクロスカントリーということになれば立派にスポーツと云えるであろう。

又学校で行わせる鉄棒運動は普通あくまでも運動に過ぎないのであるが、同じ鉄棒運動であっても、体操競技会にて行かうそれは立派にスポーツ活動と云って差支えないのである。

以上の様に「勝敗」はスポーツの本質であると考えるのであるが、一体「勝つ」といふ、或は「負け」というが、その対象となる「何物か」が存在しなければならぬであろう。「何物か」が其所に存在して、それに対比して「勝つ」或は「負け」といえるので対象となる「何物か」のない「勝敗」はあり得ない。

その対象物は一体何か？ 我々は勝敗をよく云々するのであるが、一体何に對して勝つ或は負けると口に出しているのでしょうか？

又同時に我々はその対象物は明らかに究明し、適切に把握しているであろうか？ それを明確に把握しなければ「仲裁人と喧嘩をする」体の全くナンセンスを現出することになるのである。

現在の学校体育はスポーツ教材を指導すると称しながら、第一の勝敗の対称の存在しない……則ち勝敗の存在しない大筋郡活動……を課して如何にもスポーツを指導しつつあるかの如き誤りを犯しているのではないか？

則ち、バスケットを指導すると称してパスでありキアッチであり、ドリブルであり、シュートである。如何にもそれは大筋郡の運動ではあろうけれども、そこには勝敗が存在しない。それ故にあくまでもそれはバスケットと云うスポーツの練習（準備）運動を指導しているとは云えるであらうけれども、バスケットというスポーツ其物を指導しているとは云い得ないのである。

第二の勝敗の対称を取違えるとは如何、此点については特に後述するのであるが、「勝とう」とする相手、則ち対称を間違えて指導するナンセンスが特に陸上競技と云うスポーツについてその殆んどと云えるのである。「仲裁人と喧嘩をするナンセンス」と表現したのであるが、此のナンセンスが指導要領初め全く現在の学校体育の、特に陸上競技についてその全部と云えるのであって、現在の要領は陸上競技というスポーツについて全く無知であるのではないかと考えざるを得ない程である。本論文は此の点が主体的に取扱われるので全くのナンセンスであると云うに止める。

「困難に対して闘うことは独特の満足を生ずるものである。そしてこの闘いがスポーツの特性を形作るものである」⁽³⁾

以上の如く勝敗より離れては、スポーツは存在しないし、又同時にその闘いの対称を取違えては全くのナンセンスに終るのである。此の様に常に勝敗の対象について適格に把握し、その対象に対して常に勝とうと全力を傾ける所に独特の満足があり、スポーツの本質が存在するのである。

以上の観点に立つことにより、先ず勝敗の対象について考察することにする。

勝敗の対象

我々は多くのスポーツ種類を知っている。又我国に於ては数多くのスポーツが行われている。然しこゝでは主として学校体育としてスポーツ教材に取挙げられている種目に限定して考えることにする。其の他のものは必要に応じて論ずることもあろうが、あらゆるスポーツ種目を挙げて論ずることは不必要でもあり不可能でもあると考えるので触れないこととする。

現在の学校体育に関して考えた場合、勝敗の対象と考えられる「何物か」は、常に人間であるとされているのではないか。則ち、A又はBと云う個人、或はAグループBグループと云う団体を比較して、常にAがBに勝ち、或はAグループがBグループに勝つのである。或はA個人がA以外の単複数の人間に対して勝つという考え方……いずれにしてもその勝敗の対象が常に人間…相対的な人にあるかの様な考え方をされているのではないか？

果してスポーツに於ける勝敗の対象は考えられている程、常に人間を対象とすべきであろうか。？

「スポーツマンが駆けたり跳んだりする時、彼は時間、距離または重力に対してたゞかい、水泳や登山を行なう時は、自然を構成する物質に対してたゞかい、斗争的スポーツおよび団体競技に於ては生きている相手に対してたゞかい、自分の弱点または卑劣さから脱却しなければならないという時は自分自身とたゞかうのである。」⁴⁾

勿論我々は、相手と云う人間に対して勝敗を考えるべき場合も多数考えなければならぬのであるが、だからと云って常にそうであるとは考えられないのである。則ち、或は時間、或は空間に対して、時には自分自身に対して勝とうとしていく場合も考えなければならぬと云うのである。

スポーツの分類

勝敗の対象が常に人であるとは限らないと書いたのであるが、今学校体育に関係の深いスポーツ種目について分類して見ると

1. 相対的に人を対称とするもの

(イ) 積極的勝利のあり方

バスケット、サッカー、ラグビー等

陸上競技会、水上競技会

柔道，剣道，すもう等

(ロ) 消極的勝利のあり方

バレー，テニス，バドミントン，ピンポン等

(ハ) 人為的勝敗のあり方

体操競技，フィギュアスケート

水泳中高跳込み等

2. 絶対的な時間，空間を対称とするもの

陸上競技，水上競技（高跳込水球を除く）

登山重量挙げ等

以上の如く大別して二通りに考えられるのではないか。則ち，人を対象として勝利を考える種目と人それ自身ではない時間，空間等を対象と考える場合である。猶，第一の対象が人である場合中のイロハ三分類については後述することにし，先ず1と2則ち，相手が，人かそうでない時間か空間かについて論述することにする。

特に第一の類に入っている陸上競技会（Athletic meeting）と，第二の類に入っている陸上競技（track and field）について考え詳論して行くことにする。

陸上競技は普通個人競技であると云われる。而しながら我国に於ては，則ち陸上競技と陸上競技会との概念の混乱が存在しはしないか。例えば現行学校体育指導要領或は指導書に於てすら表題には「陸上競技」を指導するとなっているにもかかわらず，内容は全く陸上競技会を指導しようとしていると云わざるを得ないのである。

「記録の測定や順位の決定をする」⁽⁵⁾

「規則に従って競技し，その審判が出来る」⁽⁶⁾

「2回フライングをすれば，失格となる」⁽⁷⁾

その他，内容の至る所に見うけられるのであるが「順位の決定」或は「審判をする」等は全く陸上競技会にこそ必要であり又出て来る概念である筈であろう。結局，

「必要な規則について知り，練習や競技ができるようにする」⁽⁸⁾

等内容として「練習をする」とか「競技をする」とかの言葉が使用されているのであるが、総体的にまとめてその概念を引き出して見ると、

「競技をする」という内容はそのまま陸上競技会……順位の決定や、審判や、規則の必要と考えられる「陸上競技会或は大会試合」を意味していると考えられるのである。

ここにこれ等の要領は陸上競技、則ち陸上競技会を意味していると解釈するわけである。則ち表題としては陸上競技を指導するが如く書いていながら、その内容には陸上競技会を指導する様になっていると云わざるを得ないのである。

以上の如く陸上競技則ち陸上競技会と考えた場合には成程その勝敗の対称は人間にある。全く競技会に於ける「勝敗」の対象は自己以外の総ての参加者に外ならない。則ち自分以外の人間を対象として「勝とう」としているわけであって、それ以外の何物でもあり得ない。

本来競技会 (meeting) と云うものは一体何か？ それは「一定の日時に一定の場に、一定の範囲の競技者を集め、その範囲の内にて最も強い者、最も優秀なる者を選出する方法」である。則ち、日時を異にしても駄目であり、場所を異にしても何にもならない。或は又範囲を越しても勝利者とはならないのである。必ず一定の時所、一定範囲が条件なのであり、又その条件に従って最優秀なる人を選出する方法に過ぎないので、それ以外の何物でもないのである。例えばその前の日に最優秀であっても、或は別の場に於てそうであっても、その日、その場に於てでなければ「勝利者」とはならないのである。

と云うことは「勝者」となり得る者は唯一人である。幾人の参加者がその試合に参加してようと最優秀なる者は唯一人……最優秀なる一人をもって勝者と云うのであるから勝者は一人であるのである。他の者は全部敗者である。例えそれが最優秀者に匹敵する程の力であろうと或は遠く及びもつかない程の力であろうと敗者であることに変わりはない。

若し仮りに指導要領の如く、陸上競技則ち陸上競技会とすれば学校体育の場に於て何が故に最も優秀なる一人を選出する方法……而も、その一人のみが勝者で残りの者全部が敗者である様な教材を採用しなければならないのであろう

か？ 猶一層悪いことには児童，生徒の大部分はそれを行う前に既に大体の優秀さ劣等さは知っている．陸上競技と云うスポーツはその様な性質を持っているではないか．則ち，一学級，一学年等通して眺めた場合，大凡早い者は早いし，遅い者は遅い．遅い者が急にその時に早くなったり，或は早い者が急に遅くなったりは殆んど考えられないのである．まして若しその級，その学年中に特別に早い者が一人でも二人でも存在した場合……こう云うことは往々によくある例であらうが……他の者が少々頑張ってもその一人に勝って勝者となることはまず考えられないのである．則ち，Aは初めから……その様な試合等やってみる迄もなく既にその「勝利」はわかっているものであり，同時にその他の者は同様に「敗者」になることはわかっているではないか？

以上の様に初めから勝敗の判明している様な教材が本来教材として使用を許されるものであらうか？ 則ち，強い者，早い者は少々力を加減して行っても勝てるのに弱い者，遅い者は少々頑張っても猶敗北する，負ける……此の様な性質の教材が果して教材……学校教育の一環としてその存在が許され被教育者に対してその履行を命ぜられる等，学校教育の立場より見て許されて良いものであらうか？

何が故に何の必要があって学校体育に於てわざわざ陸上競技会（Athletic meeting）等行わせて最も優秀なる一人を選出するのであらうか？ 或はその為に殆んど大部分の劣等者を作らなければならないのであらうか？

此の意味に於て陸上競技会（Athletic meeting）の教材として存在はむしろ生徒児童に対してその劣等感をこそ養成するものと云わざるを得ないではないか．

実際に年一回位の学校行事等として普通行われている「運動会」に於てすら，彼等の劣等感を養成し如何に彼等の「陸上競技会」に対する，ひいては陸上競技に対する嫌悪感を養成しているか．まして学校体育としてその時間毎にそれを行わなければならないとすれば，その嫌悪感の養成は我々体育指導者の想像に絶するものがあると考えるのである．

此様に行わせ，指導すればする程益々その嫌悪感，劣等感を養成する様な間違いは一体何に原因して招来するのであらうか？

全く陸上競技と云うスポーツを以って、そのまゝ陸上競技会と見誤った点、或は両者の概念の混乱に外ならないのである。

陸上競技 (track and field)

陸上競技を代表して第二の時間空間に対して勝敗を争うスポーツを説明しよう。

陸上競技は普通個人競技であると云われる。

前説の如く陸上競技を以ってそのまゝ陸上競技会……すなわち幾人かとの試合のみを考えるならば個人競技と云うことはおかしい。個人競技……一人で競技するという意味なのである。自己自身のみで競技をするのである。

而し「競技をする」「技を競う」と云う以上則ちそこに何物か勝敗の対象が存在して、その対象物に対しての勝敗であり競技でなければならない。陸上競技と云う個人競技に於ける勝敗の対象とは一体何か？ 則ち、それが絶対的な時間であり空間であると考えerわけである

例えば陸上競技 (track and field) と云う競技の内 100meter 競技について述べればA個人が 100meter を何秒で走り得たか？ と云うことである。但しそれだけでは如何にも競技、勝敗ではないであろう。その何秒で走り得るかという時間……此の絶対的時間が問題なのである。

則ち、此の時間の目標をAがいずれに置くか？ 全人類が示し得た最高 (10秒0) にその目標を置くか、或は自己が昨日迄に示し得た最高に置くか、それはAの自由に属するが、此の場合彼が13秒0 (自己の過去) を目標と説置して競技し、12秒9と云うタイムにて走り得た場合を以ってAは100meter と云う競技に於て勝ち得たのであり、13秒1迄しか出し得なかったとした場合が負けたと云うわけである

則ち、陸上競技に於て最も普通に考えられる勝敗の対称となる時間は自己の最高記録なのである。昨日の自己に対して競技し、勝敗をいんどんでいるのであって、他人に対して云々をしているわけではない。こゝに陸上競技と云う個人競技が個人競技である所以が存在するのである。又例えA個人がその目標の設定は自由であるからとして「ヘイズの10秒0」を目標対称と設定したとしても

Aの対称は決して「ヘイズ」と云う人間に対して挑戦しているわけではなく、あくまでも「ヘイズ」が示し得た最高10秒0と云う時間に対して挑戦しているわけである。

以上の如く陸上競技という個人競技も其れ自体に於て立派に勝敗を伴ったスポーツであるのであって決して陸上競技会と云う相対的な勝敗の場に於て初めてスポーツと云う形を取るわけではないのである。

此点前にも述べた様に指導書や指導要領に於て「練習をする」「競技をする」等多く使用されているのであるが、例えば、

「自己の能力を知り、自発的に練習する」 P 84

「まじめに練習し、自分の能力を伸ばすように努力する」 P 89

「生徒がおのおの自分の目標を立てて積極的に練習するように指導する」
P 94

その他、方々に出て来るのであるが、之によって判断すれば陸上競技会が初めて競技でありスポーツであって所謂陸上競技と云うスポーツはあくまでも単なる練習でしかないのである。単なる運動、練習としか考えられていないのである。

こゝに現行指導要領或は指導書は陸上競技と云うスポーツについて全く無知なのではないかとさえ書いた原因があるのである。

以上第一の相対的な人間を勝敗の対称と考えるべきスポーツと第二のそうではなくてあくまでも人そのものではなく絶対的な時間、空間あるいは重量等をその対称として考えるべきスポーツについて論じたのであるが、猶陸上競技について考えて見ると、陸上競技或は水上競技と云う個人競技と呼ばれるスポーツはその勝敗の対象について特に明瞭に把握して指導しなければ「仲裁人とケンカをする」ナンセンスが生ずるのである。

則ち、陸上競技(track and field)の場合は、自己自身の過去に対して0.1秒でも、1cmでも勝たんとする競技、スポーツであるが、陸上競技会 (Athletic meeting) と云うことになると、その本質、陸上競技の本質はあくまでも内在するのであるが、同時に相対的に自己以外の人間に対しても勝たんとする競技、スポーツなのである。いわば、陸上競技会の方になると、その勝敗は二重

に考えられるのである。自己自身に勝つと同時に他人にも勝つのである。それ故に陸上競技会に於ては結果的には自己自身にも勝ち、他人にも勝つ場合もあり、自分には勝っても他人には負ける場合、或は反対に自分には負けていながら、他人には勝つ場合もあるであろうし、極端には自分にも負け、他人にも負けたと云う場合も当然考えられるのである。

此様に陸上競技会となれば、自分にも他人にもとその勝敗は二重になるが、陸上競技というスポーツに於ては他人を対象と考える必要はないのであるから、自己自身のみを対象と考えればよいのである。

則ち、昨日までの自己に対して勝つ……こゝに所謂陸上競技の本来の姿があるのである。

此所に指導要領や指導書でいわゆる「順位を決定する」とか「審判をする」とか極端には「2回フライングをすれば失格となる」等の内容は全くその勝敗の対称を取り違えたナンセンス以外の何物でもあるまい。例えば、具体的に授業中の試技でありながら「2回フライングをしたら失格となる」……失格した生徒は一体如何にすればよろしいのであろうか？ 果して正課の時間中に「失格」をするとは如何なる意味を持っているのであろうか？ ……この様なナンセンスの事態が起って来るのである。

積極的勝利と消極的勝利について

前分類の一、二については以上であるが、第一の相対的勝敗……人を相手とする勝敗のあり方の内④⑤について述べることにしよう。

④⑤いずれにしても共に常に人を対称として相対的に勝敗或は優劣を争うことは全く同じであるが、前に陸上競技と陸上競技会を代表して述べた様に、こゝでは積極的勝利の代表としてバスケットを消極的勝利の代表としてバレーについて具体的にその相違について述べ、あわせてそれをもととした指導について考えることにしよう。

積極的勝利と云うのは、それを行う時に「勝とう」とするならば、積極的に相手を乗り越えて或はねじ伏せてでも相手より以上に自己を挙げようとする場合を云う。

之に反し消極的勝利と云うのは、同じく勝たうとすることは変りはないが、

先ず最初に「負けまい」とすることを云う。勝敗を争うのであるから常に勝を否定すれば敗、敗を否定すれば勝であろう。

この場合先ず「敗」を否定しようとするのが則ち勝に通ずるという勝利のあり方の競技を云うのである。

バスケット及びバレーについて述べて見よう。バスケットと云う競技は如何に防禦を完全に行っても……則ち、相手のシュートを如何に完全に押えたとしても、自分が或は味方が積極的にシュート攻撃しなければ勝つことは出来ないのである。又相手が如何にシュートを行ったとしても味方がそれ以上に……相対的なのであるからそれ以上にシュートを成功すれば勝利なのである。則ち、相手の攻撃が非常にはげしくて100点を挙げたからと云って味方の攻撃が其れ以上にはげしく101点を取れば、相対的に勝利となるのであり、相手の攻撃が非常に上手で100点などと大量得点を得たから絶対的にそれ自体に於て勝つというものではないと同時に相手の攻撃が非常に弱く10点しか挙げ得ないとしても味方が9点であればやはり敗北なのである。

則ち、勝利を得ようとすれば、どうしても相手の技能以上に積極的に伸び挙がるのでなければ勝つことは出来ない種類の競技を云う。

之に反しバレーは如何。

バレーボールという競技は全く反対にお互のミスの数によって勝敗を分けるのである。則ち、相手のミス、相手の敗北が則ち味方の勝利となる競技である。所謂「負け残り」と云う勝利なのである。いわば、初めより21点をお互に持っていて（9人制の場合）お互にミスによって失点をして行くのである。そして早く21点をなくしてしまった方が負けである。そして相手が21点なくした時に1点でも2点でも未だなくさないで残した方が「勝利」となるのである。

それ故に前のバスケットの場合と異なり先ず絶対にミスをしなければ必ず勝てる……という競技の種類なのである。所謂勝敗というのは相手が負けるのであって負け残り、則ち勝利という競技である。以上、相対的勝敗の内④⑤について各々その特徴に触れたのであるが、猶指導について一、二特に述べることにする。

現行指導要領に於てはバレーの指導についてもバスケットの指導についても

全くその内容は同様に取扱われていると思われる点である。いわく、

基本技能、応用技能、ゲーム

である。所謂「球技」……一般として全く同様の取扱いとなっていると考えられるのであるが、果してそれを指導される生徒、児童の側より見た場合如何であろうか？ 勿論勝敗の対称は両方共相手の人間であることに変わりはないのであるが、その勝利のあり方に於て全く双方に逆の関係が存在するのである。則ち、バスケットの方は味方に多少のミスがあっても、ミス以上に攻撃することによってそのミスをカバーすることが出来るのであるが、バレーの方は味方のミス其れ自体が既に失点となり如何に攻撃すると云っても、そのミス自体をカバーすることは出来ないのである。こゝに此の両者の指導に当って当然配慮されなければならない重要な相異が存在すると考えるのである。

則ち、バレーを行わせ指導しようとする場合に於ては如何にそれが勝敗を本質とするスポーツであるからと云っていきなり勝敗の場に生徒児童を投入すると云うことは未だ極く初歩の中学生等にあつては、唯いたずらに彼等のミスを目立たせるのみに走り、かえつてそのスポーツ自体の価値を見落す危険性が多分に存在するのである。それ故にどうしても基礎的な技能の練習を充分に行わせ出来るだけ彼等のミスを避けることに重点を置いた指導が必要になると考えられるのである。

而しながらバスケットの方はどうか。「ミスを避ける」指導の必要性が全くないとは断言出来ないかも知れないが、前のバレーの場合とはそのミスの性格が異っているのであるから、むしろミスを恐れる、ミスを避けると云うよりも当然起り得るであろうミスを予想してむしろそのミスを利用し、そのミスを積極的にカバーする様指導することが要点となるのではないか？ 則ち、初めから勝敗の場に投入して行けば勝ったり、負けたりするのである。が、勝敗は学校体育に於ては手段である。勝つことによって勝った原因を考え、猶一層の勝利を望むよう。負けることによって、負けた原因を探り、次の勝敗の参考に資せしめる。

則ち、ミスを見逃すと云うのではなく、むしろミス或は欠点を積極的にカバーし克服して前進しようとする所に勝敗を伴うスポーツ教材の意義が存在する

ことを考慮するならば、此のバスケット形の教材こそ全く理想的な教材と云えるのではないか。

次に㊦の人為的勝敗について述べよう。

例えば体操競技会のごとく、相対的に幾人かの人の中より最も優秀なる一人を選出する方法である……このことは先の陸上競技会の場合と良く似ているのであるが、陸上競技会が一着になったもの、或は最も高く跳んだ者と云う様にその優秀さの尺度が、明瞭に定まっているのに反し、体操競技会に於てはその尺度が明瞭に規定されていない。比較的に上手な場合比較的に優秀であると、あくまでもそれを判定する人があって、その判定人によって人工的に勝敗が定められるのである。

学校体育に於て課している体操は飽く迄も体操運動であり、体操競技ではない。単なる体操は勝敗をともしないが故にスポーツではない。体操は運動教材ではあってもスポーツ教材ではないと考えるので㊦人為的勝敗についての詳細は省略する。

勝敗の持つ教育的意義について

以上スポーツの勝敗とその対象について述べたのであるが、学校体育の指導に於ては、唯単にスポーツ種目の概念を与え技術を指導してその種目の普及、発展を目標としているのではない。

スポーツを行わせ、生徒、児童のスポーツ活動を通じて教育をしようとしているのである。本質的に勝敗をともしないスポーツ活動を児童、生徒に課して教育を行おうとしているのである。

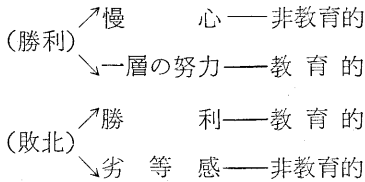
スポーツは本来勝敗をともしないものであると考えるのであるが、学校体育に於て、その様な勝敗を生徒、児童に経験として与えることは一体どの様な教育的意義を持つのであろうか。

社会体育としてのスポーツ活動の場合は、確かに「勝利」と云うのは目的として意義を持つのである。則ち「勝利」を目指して総ての力、自己自身のあらゆる総力を挙げて「勝利」と云う一点に結集する……無駄な余分な力を一切省略してその一点に集中すると云う行為……確かに目的としての意義は充分に存在するのである。

学校体育に於ては勿論、その社会体育としてのあり方を……それがスポーツ本来の姿であるから当然そのあり方をそのまま使用し、利用しなければならないことは当然であらうが、而し、同時にそれは目的としての勝利ではなく、手段としての勝利でなければならない。

勝利を目指して全力を結集することは当然社会体育に於てと同様であるが、その目指す所の勝利は……或は敗北もそれはあくまでも目的なのではなく手段としての勝利であり敗北であるのである。此点が全く両者相異ると考えるのである。

手段としての勝敗とは何か



人は勝利を目指して全力を結集してそれを行つたとしても勝敗と云う結果はあるのであるから勝利者となり得る場合もあり、敗北者となる場合もあるのである。

今その結果による心理状態を考察して見ると下図の如くなると考える。

則ち、

1. 勝利によって、全く慢心してしまう場合
2. 勝利によって、猶次の勝利を目指す場合
3. 敗北によって、次の勝利を目指す場合
4. 敗北によって、劣等感にとらわれてしまう場合

以上四つの場合が考えられるのである。

社会体育としてのスポーツ活動であれば「勝利」が目的なのであるから1、の場合則ち、勝利によって慢心して、満足してしまつて、その後は止めてしまふとしても何等差支えはないのである。或は又4の如く負けたことによって興味をなくし、止めてしまつても別に差支えもないと云えるのである。

而しながら学校体育に於ける勝敗は、手段としての勝敗である。それ故に1

の場合則ち、勝つことによって慢心してしまい、後の努力を怠ることは非教育的であり、同時に負けることによって劣等感にとらわれ勝とうと云う努力を怠るが如きは同時に非教育的であると云わなければならない。1、4の場合はあってはならないのである。

学校体育の指導者はスポーツ教材を課すことによって、生徒、児童に「勝敗」の経験を与えているのである。而しながらそれを与え、経験させるのは、あくまでも目的としてのそれであってはならないのである。あくまでも手段としての勝敗……則ち「勝つ」ことによって、猶一層の努力、或は次の勝利に向っての努力をひき出す為の手段としての勝利でなければならないし、同時に「敗北」することによって、次の勝利を目指す為の手段でなければならないのである。

いやしくも「勝利」に依って慢心し、以後の努力を怠ったり、或は「敗北」に依って悲観し、同じく以後の努力を止めてしまう等あってはスポーツ教材（勝敗を伴う）を学校体育に……学校教育の中に於て行わせ、指導せんとする意義は全く喪失する……否喪失する以上にむしろ弊害をもたらすと極言できるのではないか？

教育は不断の成長である。経験の再構成である等云われる様に「勝利」と云う経験によって猶「勝とう」とする成長をこそ願うし、又「敗北」と云う経験によって次の機会に於ける「勝利」と云う成長力を促進してこそ初めて教育といい得るであろうが、逆に「勝利」の経験によって以後の努力を怠るとか「敗北」と云う経験によってその成長力を阻害するとすれば、むしろ彼等の「勝敗」の経験は教育…成長に対して弊害をこそもたらすと云わざるを得ないではないか？

前述の如く陸上競技と云うスポーツ教材を陸上競技会と混同しその勝敗の対象を取違えて彼等に課し「如何に努力しても負けるものは負ける」という経験を彼等に毎時間毎時間与え経験させたとすれば如何に口先にて、或は一時の同情心よりなぐさめ励ましたとしても、猶彼等の陸上競技会に於ける劣等感を克服せしめ、猶勝たんとする意志、意慾を促進することはおよそ不可能に近いばかりでなく、むしろ益々その劣等感をこそ助長せしめるに役立ち、遂には陸上競技そのものに対する興味を阻害する結果となるであろう。

実状として、時間毎に如何に頑張っても、やはり相対的には負けるということになれば、誰でもそれを行うこと自体が嫌になるのが当然であろう。逆に少々位力を落して行っても猶相対的には勝つことが出来るとなれば全力にてやる方がむしろおかしい……オリンピック初め競技会に於ての第一予選等を見れば明瞭ではないか。

以上の如く「早い者、強い者」も自己の全力にて行う必要もないし、又「遅い者、弱い者」は同時に全力にてやろうとしない様な陸上競技会と云う教材は、学校教育上むしろ弊害をこそもたらすと極言する理由が存在するのである。

之に反し、絶対的時間、空間をその対象とする陸上競技に於ては、各個人は如何に相対的には優劣、強弱は存在しようとも、過去の自己との対決であり、自己自身との競技であるが為に勝利則ち前進、進歩の可能性は一に懸って各個人の努力、意志如何にあり、いさゝかも自己以外の他人には関係がないのである。

如何に相対的には遅い者、弱い者であろうと、それはそれなりに相応の勝利の可能性を持ち得るのであり、如何に強い者、速い者と雖も、自己の全力を持って行わない限り敗北の可能性を持つのも同様である。

陸上競技において「より早く、より高く、……」と云われるその「より」は常に自己の過去に対比しての「より」であって、決して「他人より」と相対的な対比を意味しないと解釈しなければならない。

- 注1 スポーツの歴史 ベルナル・ジレ 19頁
- 注2 体育総論 栗本義彦監修 広嶋英雄著 47頁
- 注3 スポーツの歴史 ベルナル・ジレ 15頁
- 注4 スポーツの歴史 ベルナル・ジレ 15頁
- 注5 文部省 学習指導要領 中学校 154頁
- 注6 文部省 学習指導要領 中学校 166頁
- 注7 文部省 中学校保健体育指導書 101頁
- 注8 文部省 中学校保健体育指導書 100頁

(昭和42年9月30日受理)